RIRC
宗教情報リサーチセンター

（公財）国際宗教研究所　宗教情報リサーチセンター

「ラーク便り」　研究ノート

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは**こちら**をご覧下さい。

＊印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

研究ノート②

長期的記事データ分析から明らかにする テロ組織「ボコ・ハラム」の活動

藤井修平

はじめに

本稿は、ナイジェリア北部で活動を続けるテロ組織「ボコ・ハラム」に対する長期的な視点からの分析を試みるものである。同組織は2010年からテロ行為を開始し、2014年5月には寄宿学校の女子生徒276人を拉致し、世界中からの非難を浴びるきっかけとなった。この事件は大々的に報道されたが、これはボコ・ハラムによる被害の氷山の一角でしかなく、2014年には民間人6千人以上を殺害し、この数は同年の「イスラム国（IS）」の犠牲者数を上回っている。このようにナイジェリアおよび近隣諸国では最大の脅威となっているボコ・ハラムだが、西アフリカという地理的・心理的距離の遠さのゆえに日本での関心は薄いのが実情である。そこで本稿では、文献から背景情報を補いつつ、当センターの「宗教記事データベース」から長期的にデータを集めることによって、ボコ・ハラムの活動の規模やその変遷を明らかにする。

1. ボコ・ハラム誕生と過激化までの経緯

白戸圭一『ボコ・ハラム』によれば、イスラム教徒の多いナイジェリア北部では、イスラム法であるシャリーアの刑法が廃止されたことに対する根強い反感が存在し、低迷する経済への不満とあいまって、1990年代にシャリーアの徹底的な導入を求める運動が活発化した。ボコ・ハラムの前身とされる組織「ユスフィーヤ」もシャリーアの忠実な実践を志向し、理想のイスラム国家の建設を目指して集団生活を行うカルト的なものだったという。同組織の指導者モハメド・ユスフは原理主義的なワッハーブ派の導師の影響を受けており、そこから逸れたイスラム教や、西洋の影響を受けたものを激しく批判していた。毎日新聞ヨハネスブルク支局長を務めていた服部正法の『ジハード大陸』では、こうした運動は同地にかつて存在した「マイタツィネ運動」に類似していることが伝えられている。これは、カリスマ的イスラム指導者に率いられた運動で、宗教の名の下に社会的ネットワークを形成して助け合うものだったが、政府当局から激しい取り締まりを受け、信者の多くは逮捕された。ユスフィーヤも、これと同じ道をたどったと考えられている。

この時点では組織の活動は過激なものではなかったが、21世紀に入ると政治家との結びつきなどにより勢力を拡大し、警察にも危険視されるようになり、しばしば衝突を起こしていた。この時期にユスフィーヤは暴力志向の強硬派と合流したが、メディアはこの新組織を「ボコ・ハラム」と呼ぶようになった。暴力化に至る決定的な出来事となったのは2009年7月の治安当局との衝突であり、警察とボコ・ハラムとの小競り合いが互いの拠点の襲撃に発展し、民間人も含めた600人以上が死亡した（朝日2009/7/31）。この際に指導者のユスフが拘束されたが、直後に軍により殺害されてしまった（朝日・夕2009/7/31）。この出来事がボコ・ハラムをテロ組織に変質させ、無差別テロを引き起こすようになった最大のきっかけだと言われている。とい

うのも、ユスフの殺害は明らかに超法規的行為であり、こうした当局の苛烈な摘発への反発からボコ・ハラムはますます過激化したとみられるからだ。

実際に、政府の暴力的な対応への批判もある。人権団体アムネスティ・インターナショナルは2015年6月に、ナイジェリア軍がボコ・ハラムの疑いをかけて拘束した7千人以上を軍施設で死亡させ、1,200人以上を鎮圧の過程で超法規的に殺害したと指摘している（毎日・夕2015/6/5）。服部は現地の教授の意見として、「グローバル・テロの文脈の中でボコ・ハラムを位置づければ、ナイジェリア政府は自分たちが『テロの被害者』であると主張できる……だが、問題はそこにはない。目をそらしてはいけない。真の問題は、ナイジェリアの権力に広がっているどうしようもない腐敗、貧困と格差の問題であり、それが暴力的に表面化しているのだ」（231-232）と述べている。

2. テロ攻撃の大規模化と潜伏

指導者を失ったボコ・ハラムはしばらく沈黙していたが、水面下でテロ活動の準備を整えており、2010年7月にアブバカル・シェカウがボコ・ハラム指導者就任宣言を行うとともに、各地でテロ攻撃が相次いで行われるようになった。同年中には刑務所襲撃（朝日・夕2010/9/9）、キリスト教会爆破事件（読売2010/12/30）を引き起こし、翌11年にも8月の国連施設自爆テロ（産経2011/8/27）、11月の警察襲撃などを行っている（読売2011/11/7）。その後ボコ・ハラムはISとの関係を強化、2014年8月には制圧したグウォザを拠点としてイスラム国家樹立宣言をし（毎日・夕2014/8/25）、2015年3月にはISの傘下に入ることを宣言した（産経2015/3/9）。ISを模倣して町や村の占領を開始し、ボルノ州第二の都市バマを制圧するなど2015年初頭にはナイジェリア北東部に広大な支配領域を有していたボコ・ハラムだが、3月の大統領選挙でボコ・ハラム掃討を掲げるムハンマド・ブハリ氏が大統領に就任して以後はナイジェリア軍も攻勢を強め、チャド軍もそれを助けた。その結果15年末には多くの都市は奪還され、拠点を失ったボコ・ハラムは周辺地域への潜伏を余儀なくされた。しかし、これでボコ・ハラムが消滅したわけではない。2018年時点でもカメルーンやチャドとの国境に位置するチャド湖付近では襲撃事件が頻繁に起き、同時に都市部での自爆テロも続いている。

3. データから見えるボコ・ハラムの変遷

本稿では2009年から2018年までの期間のボコ・ハラムに関する新聞記事を包括的に収集し、それを用いてボコ・ハラムが起こした事件のデータベース作成を試みた。それぞれの記事から事件の起こった日付、地域、狙われた対象、攻撃の手段および犠牲者数を抽出し、集計を可能とした。日本のメディアで報道されないものが存在する以上、このデータから厳密な数を把握することはできないが、それでも長期的な変化を追えば多くのことが明らかになるはずである。では集計結果を見てみよう。まず時期ごとの事件の規模と頻度を知るために、ボコ・ハラムによって殺害された人数と拉致された人数をグラフ化したのがグラフ1である。

ここから読み取れるのは、2010年のテロ活動の開始以降被害は出続けていたが、とりわけ2014年に死者・拉致被害者ともに数倍の規模に跳ね上がったことである。同様の状況は2015年後半まで続くが、それ以降は掃討作戦の成果により被害規模はかなり小さくなっている。次に地域ごとの差異を調べてみよう（図1）。

この図は事件の起こったナイジェリアの州の情報を集計し、頻度別に色分けしたものである。

グラフ1　時期ごとの死者・拉致被害者数

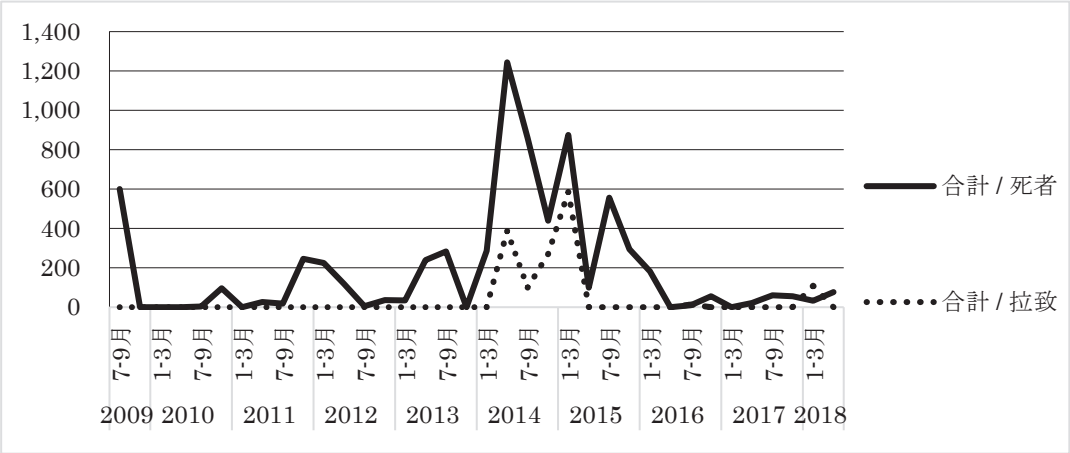
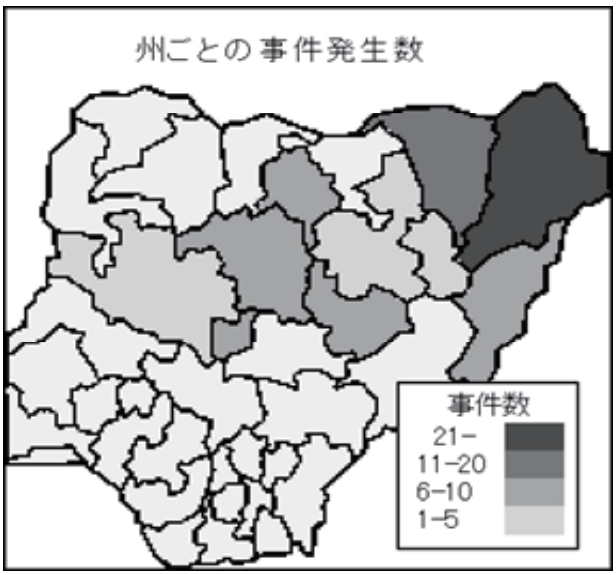


図1



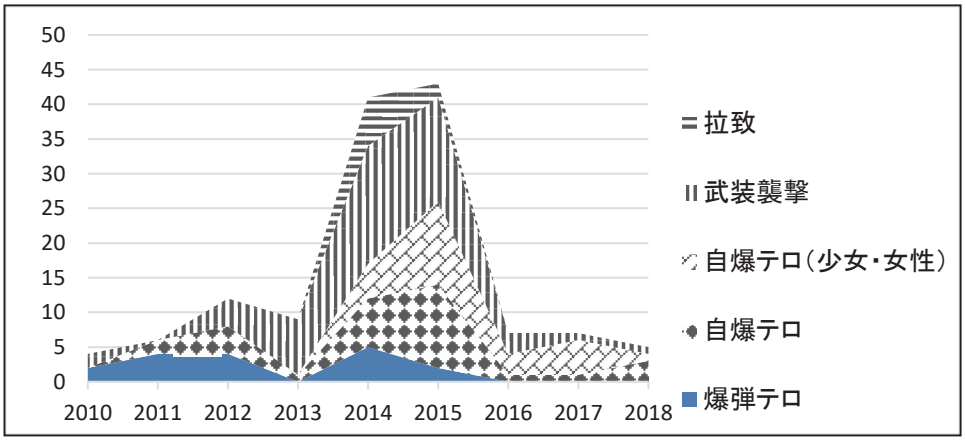
北東の最も色が濃い箇所がボルノ州であり、他州の数倍となる65件の事件が起きている。隣接するヨベ州、アマダワ州もそれに次ぐ。南部では一切ボコ・ハラムの活動が見られないが、南限と言えるのが中央の小さな州、首都アブジャの位置する連邦首都地区である。見てわかるように、テロ事件はもっぱら首都とボルノ州を結ぶ線上で起こっている。ただし、首都への攻撃が相次いだのは2010～12年までであり、それ以後はとりわけ北東部に事件が集中している。図に示した他に、隣国カメルーンとチャド、ニジェールでも襲撃事件などが起きているが、こちらは2014～15年の時期に頻発している。

一般にナイジェリアでは南部にキリスト教徒が、北部にイスラム教徒が多いとされているが、多くでは両宗教が混在し共存している。北東部ボルノ州のチボクでも、現地住民は「家族で宗教が違うのはチボクではよくあること。宗教の違いで争いが起きたことは一度もない（服部2018：224）」と語り、「狂信的な傾向を強めるボコ・ハラムにとっては、宗教の違いに寛容なチボクの伝統が気に入らなかったのかもしれない（同上）」と述べられている。

続いて上記グラフの拉致被害者に目を向けると、2014年から被害が出始めたことがわかるが、この時期にテロの手法が変化したのだろうか。その点を明確にするために、次に起きたテロの手段を分類してみよう（グラフ2）。

ここでは、爆弾による攻撃のうち犯人の死亡が明記されているものを自爆テロとし、その中で

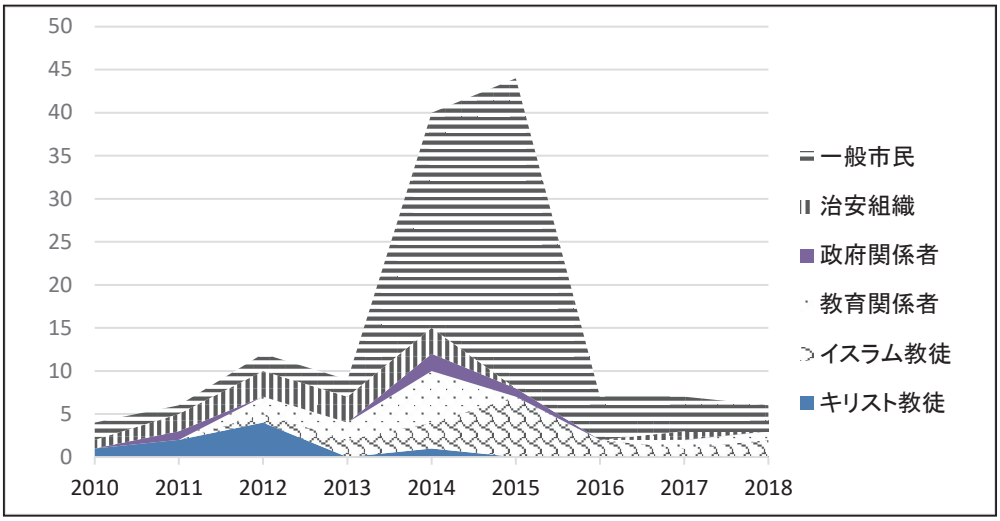
グラフ 2　テロの手段による分類
（縦軸は事件数）



もとりわけ少女や女性が行ったとされるものを別項目とした。武装襲撃とは重火器を持って村や学校などを攻撃する行為である。襲撃行為が割合としては最多であり、軍の掃討作戦によって弱体化するまではこの方法が主であった。2014 年以後は自爆テロ、とりわけ少女・女性によるテロが急増するが、これは拉致事件が増加した後に始まっている。すなわち、拉致した少女に自爆テロを行わせているのである。続いて、テロで狙われた対象についての情報をグラフ化しよう（グラフ 3）。

ここでは事件の起きた場所からテロの対象を推定している。警察であれば治安組織、学校は教育関係者、キリスト教の教会とイスラム教のモスクはそれぞれの宗教の信者に分類されており、市場など公共の場の事件は対象を一般市民とした。ここからは第一に、ボコ・ハラムによるテロが決して「キリスト教とイスラム教の対立」ではないことがわかるだろう。確かに初期には

グラフ 3　テロの対象による分類
（縦軸は事件数）



キリスト教会が襲われており、イスラムの価値観を広げるためのテロという目的が読み取れたが、2014年以後には対象は無差別的になり、むしろイスラム教のモスクが狙われる機会が増加している。同様の目的の消滅は別の点にも見られる。ボコ・ハラムとは「西洋の教育は罪」を意味する通称だが、実際にこの組織は自らの基準に沿わない教育機関を敵視しており、初期には多くの学校が狙われた。しかし2015年頃にはそうした方針は消え失せ、一般市民にテロを繰り返すだけの暴力集団に変質している。2009年以前の比較的穏健な時代も考慮すれば、イスラム的理念による社会変革を目指した集団が過激化し、その暴力の対象が無差別に拡大していく様子がここに如実に示されているといえる。

4. 普通の人々を過激化させる手段

ボコ・ハラムがイスラム教徒も無差別に攻撃しているのであれば、この組織はまったく「宗教的でない」と言えるのだろうか。少なくともボコ・ハラムが「イスラム的」かどうかということに関しては、そう呼ぶことは適切ではないだろう。これまで見てきたように、ボコ・ハラムの誕生と過激化には経済的低迷や政府の過剰な取り締まりなど政治的・社会的要因が絡み合っており、単純にイスラム思想がこの組織を生んだとは言えない。前述の服部も、「ボコ・ハラムは爆弾で人を平気で殺す、悪魔みたいな連中だ。イスラーム教徒？とんでもない。イスラーム教は殺人を許さない宗教だ（225-226）」という地域住民の声を伝えている。

だがここでカルト研究の視点を導入してみると、ボコ・ハラムと「カルト」と呼ばれる集団の間には、いくつかの共通点が存在する。注目すべきなのは、この組織がメンバーに対して何らかの教育を施している点である。命を捨てる自爆攻撃を敢行させるためには、戦闘員がその指示に従わなくてはならない。では、どのような教育ないし「洗脳」が行われているのだろうか。この点については、テロ対策の観点から、なぜ人は命を捨てるような過激な行動に参加するのかに関する研究が存在する。その一つが人類学者スコット・アトランによる「献身的活動家理論Devoted Actor Theory」である（Atran 2016）。アトランはこの理論を中東での自爆攻撃の未遂者へのインタビューなどから作り上げるに至ったのだが、この理論は「聖なる価値」と「アイデンティティ融合」の概念を主軸としている。聖なる価値とは、それを守るためにはいかなる非合理な行為も正当化され、物質的な危険も無視されるような、テロ組織が掲げる宗教的信念である。アイデンティティ融合は、個人と組織の間の境界が無くなり、特別な使命を果たすための集団的な意識の存在を指す。この両者が関係して、一般人が「献身的活動家」に変わるというのがアトランの見解である。

また心理学においては、ファサリ・モハダムによるテロに至る過激化の諸段階をモデル化した「テロリズムへの階段」理論が存在する（Moghaddam, Warren and Love 2013）。これは、自らのアイデンティティが脅かされていると感じ、社会への不満を抱き、その原因とみなされる敵が認識され、集団内のアイデンティティが統一化されてゆき、集団の外部の人が人間とはみなされなくなる、というステップを踏んでいくことによって普通の人間が徐々に過激化し、最後には暴力以外に手段がないと考え、テロを実行するに至るまでの状況を一般化したものである。この「テロリズムへの階段」はボコ・ハラムに当てはまるだけではなく、いわゆる「カルト」の理解のためにも有用であると思われる。

このような広い視野の研究に加え、ボコ・ハラム自体に対する調査も行われている。同組織はとりわけ少女を自爆テロの要員とする点が特異かつ悪質であり、少女が自爆犯に仕立て上げ

られる過程について着目がなされている。救出された少女に対する取材によると、拉致された少女は戦闘員と結婚するか、奴隷になるかを選択させられる。そして第三の選択肢として「自爆要員」が存在し、これを選択した少女は1ヶ所に集められ、神のために命を捨てれば天国に行けるとする教育が行われるという。その際には気分を高揚させ、戦闘員の指示に従わせるための薬物が使用されていたことが疑われている（毎日 2018/4/2）。この状況は少女たちが「洗脳」されたと表現されているが、指示に盲目的に従うようになる過程では、虐待と脅しによる恐怖や薬物の使用によって少女たちの判断力が奪われていたことがうかがえる。こうした行為についてある研究は、「性的・物理的虐待を行うことに加え、ボコ・ハラムはグループの使命にとっての少女や女性の有用性を最大化するために、拉致した人々の心理的虐待をも行っていた（Bloom and Matfess 2016:112）」と述べている。

おわりに

冒頭で述べたようにボコ・ハラムによる被害の規模はISに匹敵するものであるが、国際的な関心の低さのためにISに比べあまり取り上げられることはなかった。また活動が長期間に渡っているために、新聞は個々の事件を伝えてはいるが、その全体像の把握は困難だった。そこで本稿では、新聞記事を縦断的に整理することによって長期的な変化の把握を可能にするようなデータを取り出すことを試みた。この手法により、ボコ・ハラムがいつ、どこで、どのような手段でテロ活動を行ってきたのかを明示することができたように思われる。ここで用いた手法は、他の長期間に渡る出来事に対しても応用が可能と考える。

参考文献

白戸圭一『ボコ・ハラム―イスラーム国を超えた「史上最悪」のテロ組織』新潮社、2017年

服部正法『ジハード大陸―「テロ最前線」のアフリカを行く』白水社、2018年

Atran, Scott, 2016, “The Devoted Actor: Unconditional Commitment and Intractable Conflict across Cultures,” *Current Anthropology,* vol.57, sup.13, pp.s192-s203.

Bloom, Mia and Matfess, Hilary, 2016, “Women as Symbols and Swords in Boko Haram’s Terror,” *Prism*, vol.6, no.1, pp. 104-121.

Moghaddam, Fathali M., Warren, Zachary, and Love, Karren, 2013, “Religion and the Staircase to Terrorism,” in Raymond F. Paloutzian and Crystal L. Park eds. *Handbook of the Psychology of Religion and Spirituality*, second ed. New York: The Guilford Press, pp.632-648.